

## 超未熟児・極小未熟児の発達神経学的 予後調査および鹿児島市における脳性 麻痺発生率の推移

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅  
ケアシステムに関する研究)

研究協力者 畠 中 裕 幸

**要旨：**超未熟児、男37名、女56名、計93名。極小未熟児、男263名、女225名計488名。合計581名について発達神経学的追跡調査を行った。その結果C.P. 6.7%、M.R. 2.0%、てんかん1%、視力障害1.2%、ことばの遅れ1.0%、多動児0.8%などとなった。鹿児島市を中心としたC.P.発生率は、年度別にみると1,000人あたり1.5から0.59まであり、ここ2～3年発生率の減少はみられなかった。

**見出し語：**超過未熟児、極小未熟児、脳性麻痺発生率、追跡調査

**目的：**昭和52年より昭和61年までに出生した、超未熟児・極小未熟児581名について追跡調査した。合わせて、乳児健診からみた、鹿児島市を中心とした人口約58万の地域についての脳性麻痺発生率推移も報告する。

**対象：**対象数は999名以下児、男37名、女56名、計93名。1,000名以上1,499名以下児、男263名、女225名、計488名である。合計すると581名。

**方法：**鹿児島市立病院周産期センター、その他からの紹介を受けた超未熟児・極小未熟児は、

経過観察児として歩行到達まで確認し、その後の発達状況は1歳6カ月健診票や3歳児健診票を参照した。市町村所属の保健婦による情報にも頼った。

一方、昭和52年より鹿児島市の2保健所、1保健センター、始良町、蒲生町主催の3～4カ月健診に参加してきた。上記1市2町の人口は約58万人である。この健診は確定診断をつけることなく(一部を除いて)要治療、要経過観察、正常の3群にふるいわけた。上記地区内での脳性麻痺児の脱漏児がないように、脳性麻痺児が受診する県内の医療機関も調査した。脳性麻痺の定義は1968年の厚生省のものに従い、転

出児は含まれるが転入児は除外した。これにより脳性麻痺発生数を年度別に調査した。

**結果：**1. 超未熟児、極小未熟児よりの異常児発生数

C.P.(脳性麻痺)は504名中34名6.7%であった。58年より61年までのC.P.18名中、両麻痺型が9名、四肢麻痺型5名、アテトーゼ型2名であった。18名中8名は独歩に達している。2名は死亡し、3名はいわゆる重症心身障害の状態で重度重複障害児である。C.P.の場合予後は両麻痺型、軽症で独歩に達し、言語障害もないか、あっても軽症のタイプと、重度重複障害の重症タイプにわかれる傾向をもつようであった。全盲かそれに近い視力障害児も1.2%発生していた。また、ことばの遅れは、他の発達面(運

動)に比べて、ことばのみ突出して遅れが目立つ例をあげたが、将来はM.R.との鑑別も必要と考える。

2. 鹿児島市を中心としたC.P.発生数

鹿児島市、始良町、蒲生町(人口約58万人)の地域における、各年度別のC.P.発生数は、昭和52年は出生数8,740名、C.P.13(1,000人あたり1.5)を最高に年々減少傾向をたどった。しかし、昭和58年の出生数8,437名中C.P.5と最低を記録したが、その後は減少傾向はみられずじまいになった。昭和59年、昭和61年は各6名、昭和60年は7名をかぞえた。絶対数(C.P.の)は不変なのだが、出生数が減少傾向を示している。このため、発生率は昭和58年の1,000人あたり0.59を最低に、最近は0.7から0.9の間にある。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨:超未熟児、男 37 名、女 56 名、計 93 名。極小未熟児、男 263 名、女 225 名計 488 名。合計 581 名について発達神経学的追跡調査を行った。その結果 CP6.7%、M.R,2.0%、てんかん 1%、視力障害 1.2%、ことばの遅れ 1.0%、多動児 0.8%などとなった。鹿児島市を中心とした C.P.発生率は、年度別にみると 1,000 人あたり 1.5 から 0.59 まであり、ここ 2~3 年発生率の減少はみられなかった。